

断で違法に行われている状態が続いている。

- ②日本複写権センターは、著作権者から複写に関する権利の委託を受け複写の利用者と許諾契約を結び、複写の使用料を利用者から徴収して著作権者に分配するなどの事業を行うなどある。

気象学会としては、気象研究ノートの場合、著作権が学会に帰属していることを明記していないなどの問題点が残されている。今後、条件を整えて、日本複写権センターに複写権を委託する方向で検討していくことが了承された。

**編集後記：**編集後記の場を借りて、会員の皆様に悲しいお知らせをしなければなりません。昨年12月まで本誌編集委員として活躍されていた山田慎一氏（気象庁数値予報課）が、2月15日夕刻、留学先のアメリカ・ロサンゼルス市において交通事故のため急逝されました。まだ31歳の若さでした。知らせを受けたとき、あまりの突然のことに呆然としてしまいました。

「天気の海外便り欄にたくさん原稿を書いて下さい」といって別れたのがつい昨日のような気がします。事故の詳細が明らかになるにつれ、その痛ましさはますますつのるばかりです。彼は、自転車で通行中に、酔っぱらい運転の車にひき逃げされたのです。犯人は逮捕されたようですが、そんなニュースを聞いても何の慰めにもなりません。

彼は1987年5月から編集委員会に加わり、特に事務局担当として編集の煩雑な事務を着実に処理し、機関誌発行の縁の下の力持ちとしての役割を果たしてくれていました。また、新企画の提案・解説題目の選定・新しい電算写植印刷の検討など、いつも積極的に発言し、投稿論

文の担当委員としても多くの努力を傾注してくれていました。つい先頃発行された本誌2月号のシンポジウム欄にも、彼が昨年3月に参加したイタリアでの大気輸送モデル評価のワークショップの報告を載せてくれています。

彼の仕事のうえでの優秀さは改めて述べるまでもありませんが、その人柄の良さ、人間的魅力、落ち着いた風貌は、職場の上司や同僚から将来を期待されていました。その将来への飛躍の第一歩として、1月はじめからUCLAの荒川教授の下で研究を始めたばかりです。その彼が、大輪の花を咲かせる前に、志し半ばで逝ってしまうとは！それも一人の無謀なドライバーのために、余りの痛ましさ、なんと言っているのか、言葉もありません。残されたご両親の悲しみはいかばかりでしょうか。先輩・同僚の悲しみの深さも例えようもありません。何を言っても空しいだけです。今はただ心から彼のご冥福をを祈るだけです。

（編集委員長）